

【010】コミュニティ音楽療法の実践から考える:評価・分析・研究へ向けて

【講師】三宅 博子

【要旨本文】

「評価」という言葉から、どんなイメージを思い浮かべますか。通信簿や試験などの学力評価、職場における人事評価、事業運営が適正に行われたかを見る事業評価など、立場が上の人や外部の人が一方的に判定を下すイメージがあるかもしれません。しかし、評価の英語表記である evaluation の成り立ちを見ると、ex(外の)-value(価値)-tion(～の状態)、すなわち「価値を外に出して見えるようにすること」という含意があるそうです。

では、音楽療法の価値を見出すために、私たちは何をどのように評価・分析し、どう使うことができるでしょうか。本講習では、音楽療法ないしコミュニティ音楽療法の実践に携わる私たちが、「自らの手で活動を振り返り、価値づけ、伝えていく」方法として「評価」を捉え直し、実際の事例をもとに試行することを通して考えてみたいと思います。

通常「音楽療法の評価」という場合、クライアントーセラピストという二者関係のなかで、査定に基づいて治療目標が立てられ、治療プロセスにおけるクライアントの変化やそのプロセスが適切であったかを評価するでしょう。しかし、個人が抱えるニーズを社会の側の課題でもあると捉えるコミュニティ音楽療法では、実践のプロセスが多様かつ多元的です。プロセスの参加者は、課題を抱えた当事者を始め、取り巻く家族や仲間、ケアワーカー、学校や職場や地域、社会全体にまで及びます。また、実践の場所や形態も、目指されるゴールも様々に変化します。

そこで参考になるのが、多様な立場の関係者が協働で評価を行う「参加型評価」、知識や経験を共有する同僚や仲間どうしで評価し合う「ピアレビュー評価」、当事者が評価のプロセスに参加する「当事者主体の評価」といった、関わる人々が価値観、立場、視点の違いを持ち寄って対話を行う場となるような評価のありかたです。音楽療法士もまた参加者のひとりとして自らの立場を問い直しつつ、変化や違いを含みこむような評価・分析の焦点や方法を協働で創っていく必要があるでしょう。さらに、そこから得られた発見や疑問を一緒に探究する参加型の研究によって、社会課題の解決にもつながるのではないのでしょうか。

評価・分析・研究の対話的なあり方はコミュニティ音楽療法に特有というわけではなく、音楽療法という異なる人どうしが出会う営み全てに関わるものでしょう。この講習を、広く音楽療法実践を省察する機会として活用していただけたら幸いです。

【講師プロフィール】

大阪音楽大学クラリネット専攻卒業。身体障害者施設、重症心身障害児施設でケアワーカーとして働きながら、日本音楽療法学会認定音楽療法士、兵庫県音楽療法士の資格取得。神戸大学大学院博士後期課程修了(学術博士)。2020年より現職。多様な人々が音楽を介して共に在る場に関心を抱いて実践・研究している。障害のある人を含む老若男女いろんな人が音楽を楽しむクラブ活動「おとむすび・おんがくクラブ」主宰。